
蛍のように

小豆久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蛍のように

【Nコード】

N0513M

【作者名】

小豆久遠

【あらすじ】

銀さん幼少期の話。

松陽先生が眠れない銀時を連れて夜の散歩に出かけます。

(前書き)

久しぶりの投稿ですね(^o^);

小豆の妄想120%で出来上がった代物です(^o^)(/www
お気を付けて下さい。

やっぱりぐぐだですorzお気を付けて下さい。

いいいいよという方はどうぞ(、(

「銀時…？」

夜、松陽が仕事を終え寝室に向かおうと歩いていたら、とっくに眠ったと思っていた銀時が縁側に座って庭を見つめていた。

「先生」

「眠れないのですか？」

松陽が優しく問うと、銀時は小さく頷き返した。

「そうですね…暑くなってきましたからね」

銀時が視線を庭に戻したのにつられて、松陽も庭に目をやった。

静かな村塾には虫の音が響いている。

チラリと銀時を見ると、無表情でただ庭だけを見ていた。

まだ幼いのに、その小さい背中にはたくさんの物を背負っている…

松陽は初めて彼を見た時そう感じた。

「…銀時」

拾った頃よりは大分心を開いてくれた。

晋助や小太郎とも仲良くしている。

ようやく子供らしくなったと思ったが油断は禁物のようだ。

「散歩に行きませんか？」

「え？今から…？」

突然の誘いに銀時は戸惑っている。

「そうです。もしかしたら、いいものが見れるかもしれませんよ」

「いいもの…」

「どうします？行きますか？」

松陽は微笑んで銀時に手を差しだした。

「…行く」

銀時は小さな手でその手をにぎりしめた。

松陽は銀時を連れて、村塾の近くにある池に来た。

「わ…」

池の周りを飛び交う虫を見て、銀時は声を漏らした。

「見事ですなぁ」

「先生、これ何？」

初めて見た蛍を不思議そうに見ながら銀時が松陽に訊いた。

松陽はかがんで銀時と目を合わせると、飛んでいた蛍を優しく捕まえた。

「これは虫なんですよ」

蛍が逃げないように手を開いて銀時に見せる。

「この光ってんのが虫？」

「そう。蛍という虫です」

「ホタル…」

松陽は、持ってきた虫かごに蛍を入れた。

「蛍は水がきれいな所にしか集まらないんですよ。この池もまだきれいなんですね」

銀時は虫かごの蛍をじつと観察した。

蛍の呼吸に合わせて、青白い光が点滅する。

「蛍の命は短くて、成虫になってから一週間位で死んでしまうんです」

「ふうん…だったら俺は蛍にはなりたくねーや」

「何故ですか？」

銀時はつまらなそうに淡い光を見つめる。

「だって、大人になってもすぐ死んじゃうんだったら何も出来ねえし」

「そうでしょうか？私は素晴らしいと思いますよ」

銀時が疑問の眼差しを松陽に向けた。

「確かに蛍の命は短いですが、その短い命の間でも蛍は休む事無く耀いて、自分の命を全うするのです。素晴らしいじゃないですか」

「……」

「いいですか銀時。」

松陽は銀時としっかりと目を合わせ、続ける。

「人生の最後だけを美しく飾るのではなく、最初から最後まで美しく生きなさい。この蛍のように」

「最初から、最後まで……」

松陽の言葉を反芻するように呟いた銀時に松陽は優しく「そう」と言った。

「いいですね？」

「…わかった」

銀時は力強く頷いた。

「気に入りました？」

「うん。でも、もういいや」

銀時はそつとかごの蓋を開けた。

かごから放たれた蛭が嬉しそうに瞬きながら、群れへと戻っていく。

「いいんですか？」

空になったかごを片手に蛭を見送る銀時に、松陽が問いかけた。

「一人にしちまったら、かわいそうだから」

「…そうですね」

松陽はそつと銀時の頭を撫でた。

「優しいですね、銀時は」

褒められた銀時は照れくさそうにはにかむ。

その表情は無邪気な子供そのものだった。

「さて、そろそろ帰りましょう。銀時、眠れそうですか？」

松陽の間に銀時は返事の代わりに欠伸で答えた。

「ふあぁ…」

「それはよかった」

2人は来た道を戻っていく。

「なア、先生」

松陽の手を握りながら銀時が言った。

「今度はツラと高杉も連れてってやる。あいつらきつとやきもち妬くからさ」

「そうですね。みんなで来たら、きつともっと楽しくなりますね」

村塾へ帰る2人を月が、星が優しく照らしていた。

「先生ー！松陽先生ー！」

翌朝。

村塾の廊下を2人の生徒がかけていく。

「おはようございます、小太郎、晋助。どうしました？」

松陽の姿を見つけた2人は止まって挨拶をした。

「おはようございます」

「おはようございます。先生、銀時の奴がまだ寝てるんです…」

小太郎が困った様子で松陽を見上げた。

「あの野郎、俺が起こしに行つてやったのに…」

その後ろで、晋助がブツブツと文句をもらしている。

「ご苦労様です、二人とも。すみませんが、銀時はもう少し寝かせてやって下さい」

笑いをこぼしながら言った松陽を不思議に思い、小太郎と晋助は顔を見合せ首を傾げた。

おわり

(後書き)

銀さんがヅラに言った言葉はきつと先生の教えなんだ!!

という妄想が膨らむに膨らんで、こんな話を作ってしまった！

(^O^)/www

気分を害してしまった方、すいませんm()m

読んでくださりありがとうございました！

感想等、お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0513m/>

蛍のように

2010年11月4日22時23分発行